離島の子育てについて
～岡山県笠岡市真鍋島でのフィールドワークを通して～

有　岡　道　博

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第61号抜刷）

美作大学・美作大学短期大学部紀要
2016, Vol. 61. 77〜88

報告・資料・研究ノート

離島の子育てについて
〜岡山県笠岡市真鍋島でのフイールドワークを通して〜

Child care on a remote island: A report on fieldwork in Manabesima

有岡　道博[i)†]

キーワード：離島、子育て、少子高齢化、放牧の子育て、安全・安心、文化

要　旨

日本では高度経済成長期以降、少子高齢化や核家族化の進展により地域コミュニテイの衰退は進み、地域の子育て力に対して大きな影響を及ぼしている。しかし、真鍋島は、離島でありながら豊かな子育て力を現在も保持している。

そこで、現地調査（フイールドワーク）を行い、真鍋島の持つ子育て力を明らかにするとともに、本土での子育てと比較して考察を行う。

1．はじめに

日本では高度経済成長期以降、少子高齢化や核家族化の進展により、これまで地域を支えてきた地縁や血縁による関係性が希薄化し、地域社会の衰退を招いた。現在、日本各地で地域コミュニテイの衰退は進み、子育てに対しても大きな影響を及ぼしている。特に新聞記事などでも取り上げられているように、子どもに対する凶悪事件も頻発し、地域の安全・安心が脅かされている。

また、離島は離島振興法による中山間地でもあり、様々な生活上の制約があるにもかかわらず、合計特殊出生率が高いことがよく知られている。この一見矛盾しているような現象は、どのような要因から起こるのであろうか。その子育て環境に関心を持ち研究を始めた。

わが国の子育て支援策は、1989 年の合計特殊出生率 1.57 をきっかけとして、1994 年に作られたエンゼルプランに始まる。その内容は、基本的に少子化対策であり、保育所対策であった。しかし、合計特殊出生率は減少を続け、新エンゼルプラン、少子化対策プラスワン、子ども・子育て応援プラン、子ども・子育てビジョンと、追いかけるように次々と子育て支援計画が作られてきた。内容も少子化対策から次世代支援へ、保育所対策から地域の子育て支援へ、また家族支援へと移り変わってきた。その間合計特殊出生率は 2005 年に 1.28 まで下がり、その後緩やかに増加し 20014 年は 1.42 まで回復しているが、出生数は依然として毎年下がり続け、いよいよ 100 万人を切るのも秒読みとなっている。そして 2015 年 4 月より子ども・子育て支援法が施行されているが、その効果の程はまだ検証されてはいない。これまでの子育て支援策は、少子化対策という目的に絞ると十分な効果をあげてこなかったといえる。

それに対し、子育ての優等生としてよくその例に挙げられるのは離島で、その一つである沖縄県の多良間島は、1998 年〜2002 年に合計特殊出生率 3.14 で日本一になった。年上の子どもが血縁関係のない年下の子どもの子守りをするアロマザリングの島[(1)]としても有

i)†　美作大学生活科学部社会福祉学科

名であり、子育てのできる地域社会が現在でも存続している。根ヶ山の言葉を借りれば「子どもの群れが地域を行きかって」おり、[1]まさに地域での子どもの放牧である。子どもがあふれかえって、群れて遊んでいる。

又、鹿児島県徳之島においても同様に合計特殊出生率は高い。日本経済新聞記事は、「市町村別に見ると、2003年〜2007年に全国で最も高かったのは、鹿児島県・徳之島にある伊仙町であり、2.42であった。伊仙町保健福祉課の美延治郷課長補佐は『徳之島には「子は宝」という格言がある。この文化が子育てに対する安心感を生み出している』と胸を張る。上位30位までを沖縄の自治体が独占し、その多くは離島や山間部だ。」[2]と伝えている。

このように離島では、現在でも地域ぐるみで子育てする文化が残っている。こうした地域は中山間地と呼ばれ、一般的に日常生活や教育など暮らすのに不便な点が多い。しかし、祭りや子育てなどで互いに助け合う精神と文化が残っており、地域全体が安全・安心な場として「保育園」の役割を果たしている。

根ヶ山は、実際に4ヶ月間多良間島に居住して実地調査を行い、多良間島での子育ての特色として以下の4点を挙げている。

・サトウキビ栽培における労働力として、子どもが価値を認めてもらえる場がある。
・運命共同体として、島の人々の連帯の強さと血縁を越えてのつながりがある。
・そのつながりの中で子どもがみんなから見守られ、重層的に世話をされている。
・親子関係の疎遠さは、自立性・能動性を育て、子作りのサイクルを速めている。

そのため、大人と子どもの世界の垣根がひくく、交じり合って生活しているため子どもの自立が早い。[3]

汐見は根ヶ山と考えを同じくする「放牧と厩舎型の子育て」(2)を提唱している。それによると近年までの子育ては、地域社会で放牧しながら育てる「放牧の子育て」と家庭で育てる「厩舎の子育て」が組み合わさった「放牧と厩舎型の子育て」であり、地域社会の子育て力に依存し、実体験に基づいた共感の言葉をかけられることによって子どもを育てていたとしている。また、放牧することは、子供が自然に育っていく自律性の獲得にもつながっていた。そして、厩舎は仕事の場でもあり、子どもに労働・文化を伝える場でもあった。

しかし、現在「放牧と厩舎型の子育て」は崩壊してきており、親の中にも放牧の子育てを経験していないものが多く、それが日本の子育ての現状を作り出した大きな原因であると主張している。また、「放牧と厩舎型の子育て」ができなくなり、「全面厩舎型の子育て」(3)になっている。そのため親に、子育て力とそれを支える豊かな人間関係が求められている。

根が山と汐見の理論を基として子育てについて調査を行った。最初に、県内の島を対象地として考え、わずか81人の島民が暮らしている笠岡市六島に、保育園があるという新聞記事から六島について調べているうち、同じ笠岡諸島にある真鍋島に興味を持った。真鍋島や瀬戸内海の子育てに関する先行研究は、見当たらない。真鍋島について離島の公衆衛生に関するものがあるのみである。(4) 島の振興計画については、笠岡市の「地域公共交通総合連携計画」(5)「笠岡諸島振興計画」(6) があるが、子育てについては多く触れていない。そのため、実際に真鍋島へ渡り、「離島の子育て」をテーマとして学生と共にフィールドワークを行い、子育てに関する研究を行った。

2．目　的

聞き取り調査（質的調査）と国勢調査を利用した資料調査を行い、言葉を中心とした質的調査の結果と数量を中心とした資料調査の結果を組み合わせることによって、より立体的に真鍋島の持つ子育て力を説明する。また、調査の結果から今後真鍋島がとるべき方策を提言する。

3．方　法

1）質的調査

①第1回調査　見学及び交流

・調査期間：2014年7月3日〜4日

・調査内容：子どもを持つ母親、子どもとの交流福祉施設・医療機関・学校の見学

②第２回調査　聞き取り調査

・調査対象：真鍋島の子どものいる世帯（6 世帯）

・調査方法：半構造化面接法による聞き取り調査

・調査期間：2014 年 10 月 17 日～20 日

・調査内容：家族構成・家庭および地域での子育てについて

子どもの遊びとその効果について等

③第３回調査　聞き取り調査

・調査対象：真鍋島の子どもとその家族及び地域住民（8 人）

・調査方法：半構造化面接法による聞き取り調査

・調査期間：2015 年 1 月 8 日～10 日

・調査内容：第 2 回調査の補足調査

２）資料調査

平成 7 年から平成 22 年の国勢調査の資料を基として、真鍋島の人口動態等を調査した。

・調査内容：人口の推移、年齢階層の構成とその推移コーホート変化率法を使用した将来人口の予測

４．調査地の概要

岡山県の西南端、瀬戸内海の中程に位置し、岡山県の西部、笠岡港から 19㎞の距離にある。笠岡諸島の南端であり、香川県との県境に接し、塩飽諸島（香川県）を経由して坂出市と結ぶ航路もあり、まさに瀬戸内の真ん中、県境の島である。

・面積：1.65㎢　周囲：８㎞

・総人口：277 人　世帯数：178 世帯（平成 22 年国勢調査）

・社会資源：笠岡市立真鍋小学校、笠岡市立真鍋中学校、笠岡市立真鍋保育所、デイサービス・うららの家等

・高齢化率：61.3%（平成 23 年現在）

・義務教育を受けている子どもの数：12 人（6 世帯）

・産業：主産業は、漁業、観光である。近年、漁業では海苔の養殖が盛んである。

・交通：定期船が約 2 時間ごとに運航し、海上タクシー等もある。笠岡港からの所要時間は、約 1 時間。

図１　笠岡市の位置

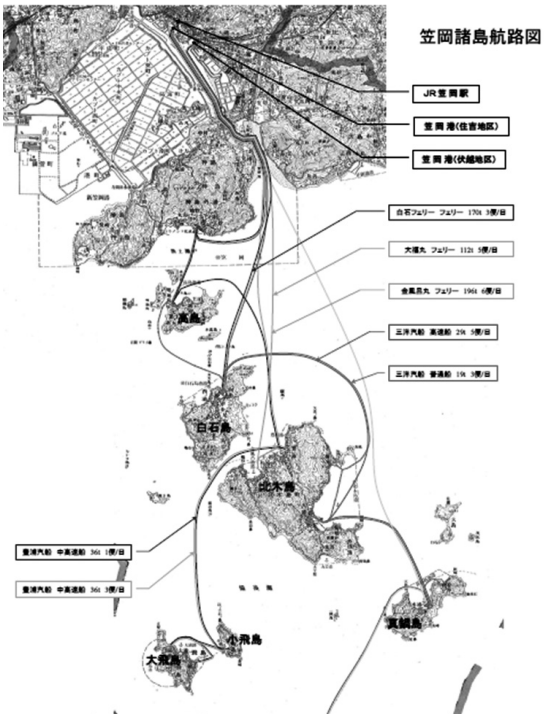

図２　真鍋島の位置

5．調査結果

1）質的調査結果

①第一回調査

1 日目は最初に、学校等の公的機関をはじめ、島内の社会資源を見学し、可能な場合は職員より聞き取りを行った。

（雑貨屋 2 件、飲食店 3 件、民宿 2 件、郵便局、漁協、農協、交番、学校、保育園、診療所、高齢者デイサービス各 1 件）

次に、地域の振興策として島に移住して子育てを行っている母親と面談を行い、移住者を募集しているがなかなか難しい現実、少人数でゆとりある教育環境と路地で遊ぶ子どもを見守ってくれる島の人の温かさを伺った。

実際夕方には、小学生や保育園の子ども達が暗くなるまで外で遊び、島民が声をかける姿を多く見かけた。また大学生にもすぐうちとけ、一緒に遊ぶ中で、子ども達の素直な性格が感じられた。

2 日目には、中学校のクラブ活動に参加し、トレーニングを一緒に行い、卓球の練習を見学した。その中で先生の細やかな個々の生徒に対する対応に感心した。

また、島の海水浴場で子どもたちと交流する中、離島としての悩み、真鍋島のよいところ、少人数の自分達への期待とプレッシャーなど中学生の思いを聞くことができた。

②第二回調査

汐見の「子育ち・子育て家庭支援の現状と課題」の論文[3]を参考に子育てアンケートを作成し、6 世帯の子育て中の家族に調査を行った。主な質問項目の結果について以下に述べる。

子どもと過ごす時間について

本土の一般的な家庭の父母が子どもと過ごす時間の全体平均は、7.2 時間[7]であるのに対し、島では約 9 時間（父母平日）であり、島の家庭の方が子どもといる時間は長いことがわかった。（表 1）特に、父親と過ごす時間が最短で 4 時間、最長の漁業者では、子どもの休日なら一緒に船に乗るため 24 時間という回答もあった。

表 1　両親と過ごす時間

Q2-1お母さんお父さんが子どもさんと過ごす時間をおしえてください。（一日あたり平均）何をしてすごしますか？

	母と過ごす時間	父と過ごす時間
○さん	5h （中2から長女自分のへやがある） 食事　散歩　会話　テレビ	
○さん	17h （保育園以外） 身支度　食事　入浴　遊び　テレビ　睡眠	13.5h （父親の業務が忙しい） 食事　遊び　テレビ　睡眠　入浴
○さん	7h ご飯　片付け　宿題　学校の準備	7h （父親が丸一日いることもある） ご飯　片付け　宿題　学校の準備
○さん	8h （おきてから2h、夕方～就寝6h） 食事　宿題を見る　風呂　会話	4h お風呂に一緒に　会話
○さん	13h （中長女） 食事　テレビ	7h （中長女） 食事　テレビ
○さん	6h （平日）16h（土日） 遊び　テレビ　お昼寝	12h （ヒマなとき24h） 暇なときは妻と同様　船に一緒に乗る

まとめ　平均9h（日本の平均7.2h）

地域の子育てについて

本土では、地域の子育てが危機に瀕しているといえる。それに対して、島では現在でも地域の見守りがあり、地域の子育てが行われていることが確認できた。（表 2）地域の大人とともに行事に参加したり、大人の仕事（漁業）を見て学んだり、大人から教えてもらったりしている。子育ての大きな要素である「仕事への準備」ができており、社会で生きていくための準備を、地域が助けている。（表 3）

表 2　地域の方に見守ってもらう時間

Q3-1地域の方に子どもさんを見守ってもらう時間はありますか？

	時間	内容
○さん	1h	犬の散歩等しているとき。（今は親がついて行っている）
○さん		いつも見守ってくれている。（地域の人が声をかけてくれる）通園　公園で遊ぶ
○さん		ない。地域の方が高齢になったため。
○さん		今はない。赤ちゃんの時はよく見てもらっていた。絆が固いため信頼できる。
○さん	0h	お願いして見るもらうことはない。
○さん	1h	海沿いの道を散歩。 自転車の練習。 遊歩道の散歩。お菓子を買って待っていてくれる。

表 3　両親の仕事を見る機会とお手伝い

Q3-2地域の方の仕事を見たり、お手伝いをしますか？

	内容
○さん	海鮮料理店の手伝い　デイサービスの手伝い　漁の出航前を見ている。
○さん	小さいので手伝いはできない。いろんな仕事を見ている。
○さん	手伝いをよくしてくれる。ご飯の用意。荷物の配達。（子どもたちは手伝うことに満足している）
○さん	行事があれば何らかの手伝いがある。やぐら組み等。
○さん	父の仕事（漁）の手伝い。おばあちゃんの畑の手伝い。（家庭菜園）休日に半日程度。
○さん	幼児のためない

子育てと遊びについて

遊びの種類について尋ねたところ、島では本土で行われている室内での TV ゲームが少なく、「ごっこ遊び」などの外遊びが多く、地域の人たちとのかかわりの中で、見守りを受けながら遊ぶことができていることが分かった。また、様々な効果が期待できるたくさんの種類の遊びが、すばらしい自然環境の中で行われていた。しかし、年齢の近い人が少なく、集団遊びが十分できていない。(表 4)

表４　こどもの遊び

Q4-1どんな遊びをよくやりますか？1番、2番、3番目を教えてください。

	①1番よくやっているもの	②2番目にやっているもの	③3番目にやっているもの
○さん	音楽を聴く人、ダンス	バスケ	話
○さん	ごっこ遊び	遊具（滑り台、ぶらんこなど）	絵本、TV
○さん	自転車、スケボー、ボール遊び	釣り、ごっこ遊び	カード
○さん	家でネットを見たりTVを見たり	友達と外で遊んだり	無回答
○さん	次男：スマホでゲーム　長女：工作	次男：漫画を読む　長女：お菓子作り	2人とも遊びに行く
○さん	チャリ、トミカ、散歩	レゴ	パズル

子どもの成長に対する満足度について

子どもの成長に対する満足度は、本土は約 40%である[8]のに対し、島では 90%を超えていた。（表 5）これはアメリカや北欧の数値と比べても遜色のない結果だといえる。本土の 40%と答えた家庭では、「子どもと過ごす時間が足りていない」という回答が多かったが、それに対して真鍋島では、親の職場が島の中にあるため、子どもを間近で見ることができるとされていた。また、逆に子どもたちも外遊びや手伝いをすることが多く、親の働く姿を見て育っている。

表５　子育ての満足度

Q5-4子どもの成長に満足していますか？

○さん	0～3才：90%　4～6才：70～80%　7～9才：50%　10～12才：70%　13才～：80～90%
○さん	満足している（成長が常に見える）
○さん	全員100%以上　地域の人がほめたりしかったり
○さん	全員満足（兄弟の中で男一人、遊び方等に不安がある
○さん	全員70%（子ども達が暮らしに適応している）
○さん	2人とも満足

２）資料調査結果

真鍋島に移住者が定住し始めた平成 18 年を考慮して、平成 7 年から平成 22 年まで 15 年間の国勢調査の結果を利用し、真鍋島の人口の推移を確認した。特に子育てに関係する年齢階層別人口の推移に着目して調査を行った。

また、コーホート変化率法を用いて将来の人口（平成 27 年、平成 35 年）を推計した。

①笠岡諸島の人口の推移

平成 12 年からの平成 22 年までの 10 年間における人口の推移を見ると、島しょ部全体で 1,021 人、約 32%の減少となっている。また、島しょ部人口に占める高齢者の割合は、平成 12 年の 49%から平成 22 年の 63%へと大きく増加した。（表 6）

表６　笠岡諸島の人口の推移

（単位：km²，人，世帯）

区分	面積	平成 12 年国勢調査			平成 17 年国勢調査			平成 22 年国勢調査		
		人口	世帯数	高齢化率	人口	世帯数	高齢化率	人口	世帯数	高齢化率
高　島	1.05	140	64	50.7	129	64	56.6	94	51	59.6
白石島	2.96	772	355	51.8	672	325	58.0	581	300	62.1
北木島	7.49	1,562	764	46.8	1,222	660	58.8	1,027	577	63.5
真鍋島	1.49	390	188	54.6	312	163	64.1	277	147	60.3
大飛島	1.05	179	71	43.0	117	60	59.8	82	49	80.5
小飛島	0.30	27	18	70.4	26	18	69.2	20	13	70.0
六　島	1.02	117	61	52.1	88	47	61.4	85	44	57.6
計	15.36	3,187	1,521	49.3	2,566	1,337	59.4	2,166	1,181	63.0

出典：「笠岡諸島振興計画」（第二次）より

②真鍋島の人口の推移

真鍋島の人口の推移を見ると、5 年ごとにかなりの割合で減少しているが、近年になるにつれてその割合は少なくなっている。（表 7）（図 3）笠岡市「地域公共交通総合連携計画」[4]によると、平成 27 年度の真鍋島の人口は 156 人以下と推計されている。しかし、平成 18 年からの移住者等の影響もあり、笠岡市役所の平成 27 年 8 月の統計によれば、真鍋島の人口は 231 人となっており、減少は続くものの、よりなだらかな減少率となっていることが分かる。（図 3）

表７　真鍋島の人口の推移

	総数（人）	世帯数	男性（人）	女性（人）
平成7年	491	228	218	273
平成12年	390	188	181	209
平成17年	312	163	141	171
平成22年	277	147	125	152
平成27年	231	134	108	123

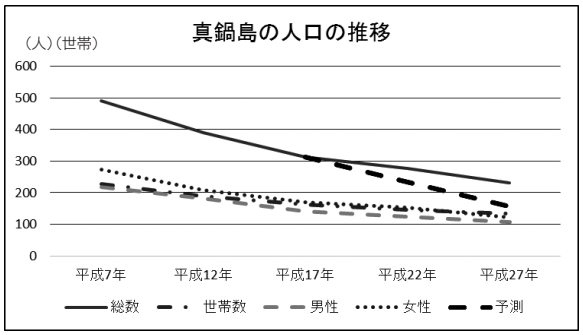

図３　真鍋島の人口の推移

③年齢階層別人口（平成 22 年）

真鍋島の人口を 5 歳ごとの年齢階層に分けて表示してみると、いくつかの特徴が見られる。

男女ともに高齢者の人数が多いのが確認できる。そして男女ともに、20 代から 30 代にかけての年齢階層の減少が大きい。特に女性のほうがその階層幅が大きく、また男性のみ 65 歳〜69 歳の人口が大きく落ち込んでいる。（図 4）（図 5）

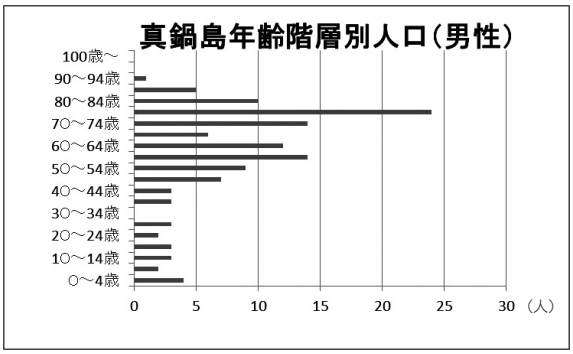

図 4　真鍋島の年齢階層別人口（男性）

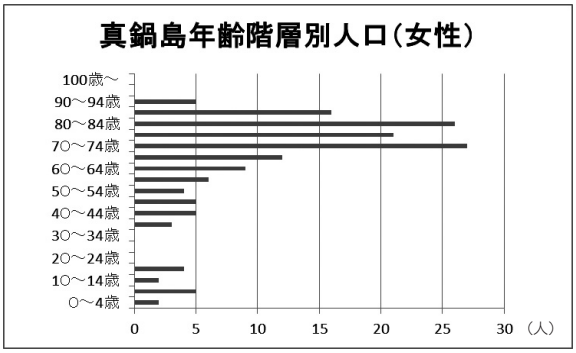

図 5　真鍋島の年齢階層別人口（女性）

④年齢階層別人口の推移

年齢階層別人口の推移をグラフに表してみると、さらにその特徴が明確となる。

男性と女性で明らかに差異があるのが分かる。女性は一つの大きな山と裾野の小さな 2 つの丘が推移している。それに対して男性は、一つの大きな山と中くらいの二つの山が推移している。また年とともに 50 歳代から 70 歳にかけて深い谷が平行に移動しているのが分かる。（図 6）（図 7）

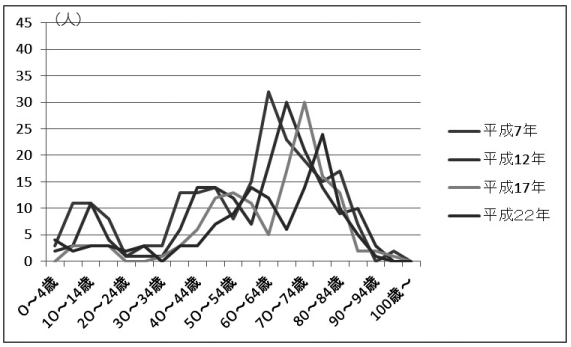

図 6　真鍋島の年齢階層別人口の推移（男性）

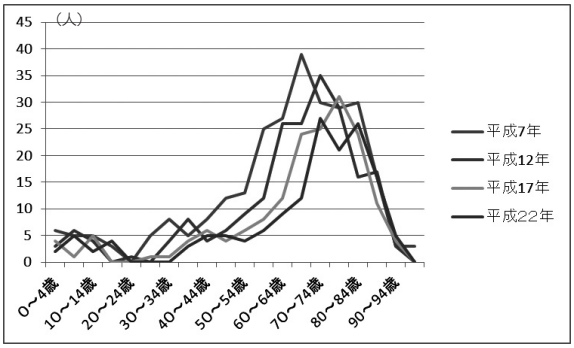

図 7　真鍋島の年齢階層別人口の推移（女性）

⑤真鍋島と笠岡市中央町との比較（男性のみ）

真鍋島が離島であって中央町が笠岡市の中人部の住宅地であることを把握した上で、以下のグラフを見ると、どちらも大小はあるが、65 歳〜69 歳の階層が大きくへこんでいるのが分かる。また、20 代から 30 代に掛けて大きな谷になっているのも分かる。（図 8）

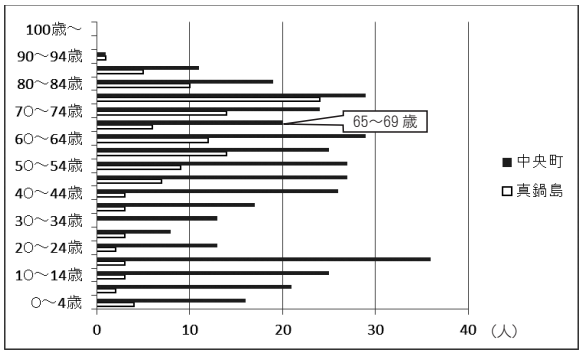

図 8　真鍋島と中央町の年齢階層別人口の比較（男性）

⑥年代別（3 区分）人口の推移

年少人口（0 歳～14 歳）、　生産年齢人口（15 歳～64 歳）、　老年人口（65 歳～）別に階層を作り、その推移を表してみた。男性は、移住者の影響もあり一度急激に（－40%～60%）減少していた年少人口が近年回復（＋50%）しつつあり、労働人口もほぼ同様（＋4%）で推移している。しかし、老齢人口は平成 17 年までほぼ同じであったが、平成 22 年大きく減少（－26%）した。（図 9）

それに対して女性は、年少人口が緩やかに（－20%～10%）減少し、労働人口は近年減少幅が少なく（－45%⇒－19%）なってきつつある。また、老年人口の減少も緩やか（－10%前後）である。（図 10）

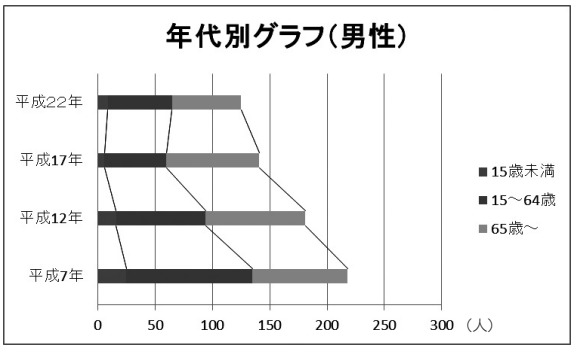

図 9　真鍋島の年代階層（3 区分）人口の推移（男性）

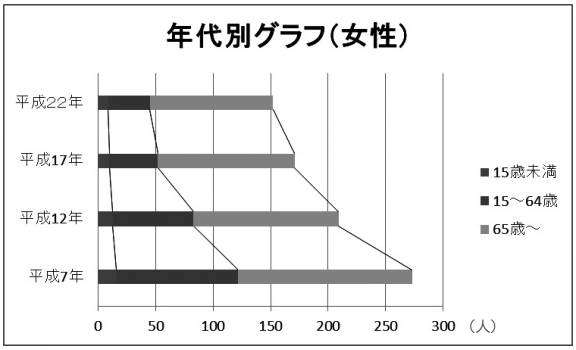

図10　真鍋島の年代階層（3 区分）人口の推移（女性）

⑥真鍋島の将来の人口予測

真鍋島の将来の人口予測を、コーホート変化率法を使用して試みた。平成 7 年から平成 22 年の国勢調査の資料を使い、平成 27 年と平成 32 年の真鍋島の人口を予測した。男性は高い山がなくなり、中くらいの山が 2 つできている。（図 11）女性は、一つの高い山と小さな丘が一つできている。また、女性は 20 歳から 40 歳まで広い範囲で世代が断絶している。（図 12）それに対して男性は 35 歳から 39 歳で分断はあるが、かろうじて世代が続いている。

平成 17 年、平成 22 年の国勢調査を基に、予測された平成 27 年の真鍋島の人口は、231 人であった。平成 27 年 8 月の笠岡市統計による真鍋島の人口は 230 人であり、予測と僅かに異なるのみであった。（表 8）

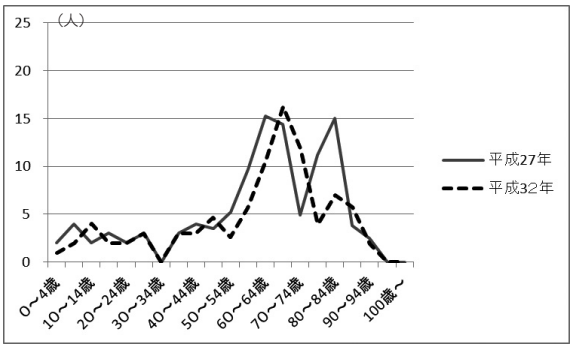

図 11　真鍋島の年代階層別人口の推計（男性）

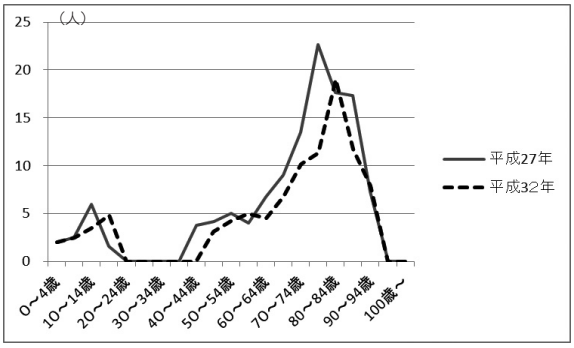

図 12　真鍋島の年代階層別人口の推計（女性）

表 8　笠岡諸島の人口の推移

	総数（人）	世帯数	男性（人）	女性（人）
平成7年	491	228	218	273
平成12年	390	188	181	209
平成17年	312	163	141	171
平成22年	277	147	125	152
平成27年	231	134	108	123
予測27年	230		107	123
予測32年	185		89	96

6．考　　察

調査結果から見えてきたこととしては、以下のことが挙げられ、これらの理由・背景を考察していくことで、離島の子育てについて論じていく。

1）質的調査結果より

①調査結果から見えてきた真鍋島の子育ての特徴

多くの点で、本土の子育てに関する調査結果を上回った。このことから、真鍋島の地域社会が、現在でも子育てに適した環境を保持していることが分かる。その理由は以下の３点であると考える。

一番目は、お互いの名前で呼び合うことができるコンパクトでつながりの強い地域社会ということだけでなく、交通が不便と言うことから来る「人と文化の移入の制限」がある。聞き取り調査でよく聞かれたのは、安全安心な環境であり、その基盤の上で重層的な人間関係が育っている。もちろん、島外への移出は制限されておらず、若者の流失は続いている。しかし、島外から移住し、子育てを行う家族もあり、少ないながらも濃密な子育ての地域社会が成立している。

安全安心な環境の中で遊ぶ子ども達に注ぐ島民たちの見守りは、日常の挨拶、声掛けに始まり、運動会などの行事での応援、よいことをしたらほめ、悪いことをしたら注意するなど自分の子や孫に対するものに劣らない。

二番目は両親の仕事である。本土に通勤している家族もあるが、大半は島内の仕事に従事している。漁師や海運業など比較的時間が自由になる職種ということもあるが、子どもたちと過ごす時間が十分取れている。また、子ども達に働く姿を見てもらえることも大きなポイントである。

三番目は、元気なお年寄りが多いということもあげられる。60％を超える高齢化率でありながら、多くのお年寄りが島で暮らすことを選択している。定年後、島にＵターンしているご夫婦も何組かいる。気心の知れた地域で人生を全うしたいという思いがあるようだ。そのため、高齢者層を基盤とした地域社会の中、お互いの信頼の上に人間関係が結ばれ、子育てに欠かせない、ソーシャルキャピタルが残っている。聞き取り調査の中でも、「子どもがすべて自分の孫であるかの様に見守り、声かけをしている」、「逆に子ども達も、高齢者に対する尊敬の念を持ち、いたわりの思いを抱いている」との発言があった。

②離島という社会との隔絶性を持つ子育て

汐見は、子どもを外に、家の近隣の地域社会に放り出して、そこで地域社会の子育て力に依存する形で育てるということを「放牧の子育て」といっている。[4]

真鍋島の現状を見てみると、地域社会の強い結びつきの中で、子どもたちが自由に行き来し、自立性を持って育っているのが分かった。現在でも「放牧の子育て」が機能していると言える。その理由としては、「離島であること」が考えられる。具体的には、漁業や農業など共同作業の必要な労働があり、それを手伝う子どもの役割と地域の強い結びつきが、子育てのできる地域社会を存続させている。根ケ山の報告する多良間島の状況と似ている。

③子育てに関する豊かな文化と自然の存在

様々な文献より子育てに必要な地域の要素として、地域の文化と自然がよく取り上げられている。

真鍋島はその電話帳からも分かるように、名字が異なり出自が違う人たちが住んでいる。四国、中国、関西、九州から様々な文化を持つ人が集まり、島の文化をつくっている。「走り神輿」等島独特の伝統文化は、現在も少ない子ども達に受け継がれ、子どもたちの誇りとするところとなっている。

また、瀬戸内海の離島という位置的なハンデイは、豊かで美しい自然があるということであり、落ち葉を見た子どもが「あ、うさぎ」と言える豊かな情操を育てている。

④暮らしやすい地域社会の指標から

横浜市が提唱する暮らしやすい地域社会の７つの指標から見てみると、真鍋島は全てが合致する訳ではない。[9] しかし、①地域の活力とつながり、②地域の人たちの交流、③地域の手作りケアの仕組み、④自然や文化とのふれあい、⑤地域の中で知恵・モノ・カネ・サービスの循環の５点でクリアーしていると思われる。「離島」、「中山間地」ではあるが、暮らしやすい地域

といえる。

2）資料調査の結果より

①過疎化進行の改善について

年齢別階層人口の推移に着目してみると、真鍋島の人口減少が近年少し緩やかになっている。これは笠岡市「地域公共交通総合連携計画」による推計値における、減少率50%以上が、26%に改善されている。これは島の人の努力とそれを支える行政、特にNPOかさおか島づくり海社（以下、島づくり海社）[10] の活躍に負うところが大きいと思われる。

笠岡諸島の島民と市職員の協働から生まれた島づくり海社は、島での起業を助け、高齢者デイサービス、保育園などの開設、移住者の促進、イベント企画の計画・実施などを行っている。真鍋島に限って言えば、高齢者のデイサービスの運営、移住者の促進、島でのイベント企画の計画実施、来島者の見学体験のコーディネートなどを行っている。その活動は大人のみに限らず、子どもたちにも及んでいる。

今回調査対象とした子育て世帯の中で5世帯は移住者であった。そして子どもの数の大半は、移住者の子ども達である。人口の減少を緩和させているのは、移住者である大人と子どもであると言える。年少人口（0歳～14歳）、生産年齢人口（15歳～64歳）、老年人口（65歳～）別の3階層に分けた経年変化のグラフを見るとそれがよくわかる。平成22年は年少人口が増えているばかりではなく、生産年齢人口が5年前の国勢調査のレベルまで回復している。[11] 子どもを育てる環境としての年代別人口は、減少に歯止めがかかり、いま少し緩やかになっていると言える。

②分断された世代構成

真鍋島の年齢階層の特徴は、男子は30歳から34歳、女子は20歳から34歳の間で世代の消失があることである。これは、高校が島にないこと、働きたい職場がないこと等が大きな原因となっている。中学校まで島で過ごしていた子どもたちは、全員本土にある高校へ進学しなくてはならず、1時間以上をかけて連絡船で通うか、下宿してしまうことが多い。そしてその上の大学、就職となるとほとんどの若者が本土の各地に散らばってしまう。特に女性にその傾向が強い。男性は家業である漁業を継ぐ人もおり、その傾向は少し弱くなっている。（図13）

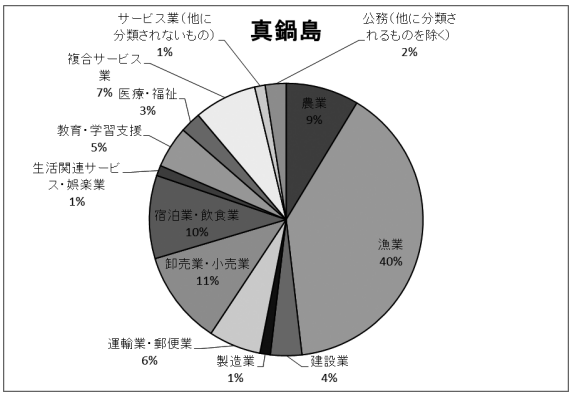

図13　産業別就業者数（平成22年国勢調査）n＝81名

結婚そして出産に欠かせない年齢の女性世代が欠落していることは大きな問題である。（図5）子どもの存在を脅かす大きな障害となっている。かろうじてそれを補っているのは、移住の世代である。また20歳代後半から30歳代でUターンしている男性、60歳以上の退職した男性もいることが統計からうかがえるが、その数は限られている。勢い移住者に頼っているところが大きいと言える。しかし、移住者の子どもも成長すれば本土に渡り、島に帰ることは難しい現状がある。島の就業状況を見れば明らかである。起業の必要性が叫ばれてはいるが難しい。

③男性の年齢階層における凸凹について

男性の65歳～69歳の年齢階層に急激な減少がみられる。（図8）これは、この世代が昭和16年～20年の第二次世界大戦中に出産したことと関係していると思われる。戦災を被っていない笠岡市中心部の中央町と比較してみると、同様な世代で減少はみられるが、真鍋島ほどではない。戦争中であり、乳児死亡率が公表されてはいないが、昭和22年の約2万人・7.5%（1000人当たり）で考えると、高速船のない当時、島からの搬送には3時間以上かかったものと思われ、乏しい医療設備の中で多くの幼い命が失われていったものと考えられる。しかし、女性にこの傾向が見られな

いことについては、現状で説明ができない。今後の調査の課題とする。

④将来人口推計より

平成 22 年に高齢化率の減少が見られるように、今後老年人口が大きく減ってくると思われる。そのため、移住者が今の割合のままで続くとして計算しているが、平成 32 年には人口が 20%減少すると推定された。その後も老年人口の減少は続き、平成 37 年には 140 人前後になると思われる。移住者が続かないと仮定すると 100 人程度にまで減少すると考えられる。(図 14)

減少率はなだらかになってはいるが、将来も人口は減り続ける。真鍋島で子どもが生まれ、地域で子育てできる環境を維持していくためには、どのようにすればよいのであろうか。

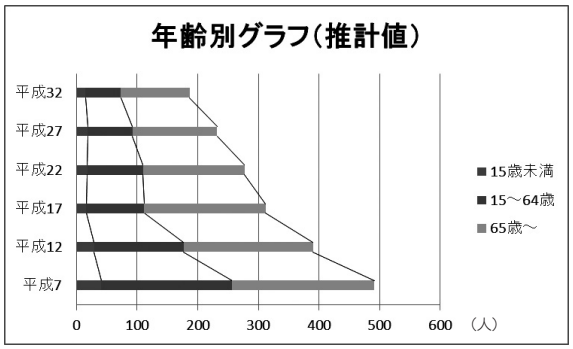

図14　真鍋島の年代階層（3 区分）人口の推移と推計

3）真鍋島の子育ての強みと課題

真鍋島がとるべき方策を考えるために、ここまでの議論をまとめ「真鍋島の子育ての強み」と「子育ての課題」を下記にあげる。

①「真鍋島の子育ての強み」その理由と背景

・子どもと過ごす時間が長い
（仕事の場と生活の場が近い　時間が自由な業種がある）

・地域での子育てができている
（安心・安全な環境　つながりの強い地域社会　元気な高齢者が多い　子どもの暮らしの中に仕事場がある
島民の子どもへの理解　豊かな伝統・文化がある）

・外遊びが多い
（安全・安心な環境　見守りがある　豊かな自然）

・子どもの成長への親の満足度が高い
（職場が島内にあり、近くで子どもたちを見ることができる　親と過ごす時間が長い）

・起業の支援がある
（島づくり海社による支援　　移住者の増加
島民による協力）

②真鍋島の子育ての課題

・人口の減少が続いている（自然減・社会減）
・急速な高齢化の進行
・孫世代を見守り、子守をする前期高齢者世代の減少
・20 代、30 代の出産・子育て世代の消滅
・限られた働く場
・地域子育て力の減退
・多様な年代による集団遊びが不十分

4）真鍋島の子育て環境を持続するための方策

「真鍋島の子育ての強み」を活かして、「真鍋島の子育ての課題」を解決するための方策について述べる。

今後老年人口の急激な減少が予測され、労働人口・年少人口も移住者がいなければ減少し、失われた世代が増えていく。また、島づくり海社の活躍と島民の努力もあるが、島へ移住を促進するには、就労の問題、教育の問題、住宅の問題など様々な課題があり困難が予想される。

しかし、真鍋島の子育て環境は守らなければならない。他の離島の子育てもそうであるが、子育てのできる地域社会は貴重となっており、日本の子育て社会を復興させるためには地域での子育てのモデルが必要とされている。離島はすべて、社会による子育てのモデルである。そのため、真鍋島も学びの島にならなければならない。「まなべし真鍋島プロジェクト」[(12)] を立ち上げ、他の機関・団体等と連携して以下の 3 点を推進していく。

①真鍋島を「放牧の子育て」の場としてひろめる

子育てに関する真鍋島の強みを生かして、子育てを学び体験する「子育てパーク」にする。まずは広報す

ることによって、「離島の放牧の子育て」をアピールし、島内外の人に関心を持ってもらう。そのうえで、準備に時間のかかる移住ではなく移入、通勤通学の子育てと教育の場を創設する。本土近接型離島という条件を逆手にとって、島へ保育に通う、学校へ通う。島を「放牧の子育て」の体験の場とすればよい。真鍋島は、子育て景勝地、子育ての無形文化財といっても過言ではない。

歴史ある木造校舎（真鍋中学校）を活かして、ユニークな子どもの自律教育で知られる、「学校法人子どもの村小学校」の誘致、ﾌｧﾐﾘｰホーム[13]や里親の誘致なども考えられる。一足飛びにと言うのではなく、現在の島づくり海社が北木島で行っている「体験研修」から広げ、子どもから社会人まで利用を重ねた上で実施する。

②女性の流出を防ぐ

子育て環境を守るためには、若年世代の流出、特に女性の流出を防ぐため雇用の場の創出が求められている。これまで、高齢者対策から介護保険関係の仕事はあったが、それ以外に仕事の幅が広がっていなかった。

そこで、子ども関係の仕事を拡充し、女性の就労の場を確保できたらと考える。保育だけでなく、放課後健全育成事業、自然体験型教育など島の強みを活かす仕事を起業し、女性の仕事を増やすことによって、Ｕターン、Ｉターンなどの移住者の促進に繋げる。

また、平地が少ない島にあっては、住宅は立て込み、迷路のように入り組んでいる。傾斜地にも構わず建てられた家並みは、とても趣があり、ノスタルジックでほのぼのとした癒し効果も持っている。町並み保存の申請を行い、女性たちや高齢者に運営管理をまかせ、島づくり会社と手を携えてイベントなどをおこなう。

③島サポーター（協力者）を増やす

島民と島づくり海社、行政だけでは課題解決に不十分である。様々なかかわり方で助けてくれる協力者が必要である。第１次「笠岡諸島振興計画」には、「協力者を如何につくるかが肝心」と書かれている。[5]真鍋氏発祥の島であり、全国の真鍋さんとのつながりもある。学生を含めた島サポーターに真鍋島に来てもらい、観光するだけでなく、自己実現に繋がるような体験、減少しつつある高齢者を援けて子どもの見守り、高齢者の生活の困り感を和らげるお手伝い等を重ねてもらうことによって、新たな価値観を創造することができ、真鍋島への来訪者・協力者を増やすことができる。

例えば、島の山間部にはミカンやゆず、八朔などの果樹が植えられていたが、現在は放置されやぶに埋もれている。また、畑にあっても、果樹は出荷されず地面に落ちるままになっている。以前は港まで運び、出荷されていたが、高齢化などにより困難になっている。そこで、島の子育てにかかわってくれている県内６つの大学の学生に呼びかけ、収穫と運搬の手伝いをお願いし、さらには大学の近辺で販売をしてもらえれば、臨時の収入にもなるし、島の宣伝にもなる。子どもたちの活躍の場、学生の自己実現の場として。そしてもちろん、島の発展のためにも役立つ。

７．結　　論

質的調査により、真鍋島は中山間地（離島）という位置にありながら、子育てに適した地域社会が存続していることを明らかにした。

また、国勢調査を利用した資料調査により、人口の減少などによってこの魅力的な地域社会の基盤がゆらぎつつあることを明らかにした。

そして、調査より浮かび上がった「子育ての課題」に対して、真鍋島の持つ「子育ての強み」を活かした解決策を提言した。

子どもたちが犯罪被害にあっているニュースが流れない日がないほど、地域の安全性が話題になっているが、片や真鍋島では、安全で安心できる地域社会が存続し、子どもたちが夕暮れの戸外で遊び、地域の大人が優しく見守っている。聞き取り調査の中で「いい思い出を持った人は必ず島に戻ってくる」との言葉があった。子ども達が再び島にかえって来ることができるように、課題解決に努めなくてはならない。今後も真鍋島の地域社会の変化について、関心をもって見守り、将来を見据えた方策を提示できるよう研究を継続して

いきたい。

最後になりましたが、調査にご協力いただいた真鍋島の皆さんへ厚くお礼を申し上げます。

註

(1) 動物学で母親以外の個体が行う子育て行為。この場合は、沖縄県多良間島において行われている血縁関係にない他の子どもによる子守「守姉」行為をさす。

(2) 子どもを外に、家の近隣の地域社会に放り出して、そこで地域社会の子育て力に依存する形で育てる「放牧の子育て」と家庭で育てる「厩舎型の子育て」が、バランスよく機能している子育ての形。

(3) 地域社会によらず家庭のみで子育てする形。

(4) 田中勇夫「真鍋島（離島）における住民の生活及び健康状態」(1 次)（1982）岡山医学会雑誌 94(7・8), P.633-644

(5) 笠岡市（2008)「地域公共交通総合連携計画」

(6) 笠岡市（2003)「笠岡諸島振興計画」(1 次)

(7) 株式会社イケア・ジャパン（2013)「子どもとの生活に関する意識調査」

(8) 汐見稔幸（2005)「子育ち・子育て家庭支援の現状と課題」平成 17 年度青少年健全育成中央フォーラム講演記録

(9) 横浜市政策局（2013)『横浜市民生活白書』

(10)笠岡市（2013)「笠岡諸島振興計画」(2 次)

(11)現在、移住者が 5 世帯あり子供を含めて 19 名が島で生活している。

(12)平成 27 年度 6 月より、岡山県「おかやま大学生中山間地域等研究・連携促進事業」の補助金を受けて、美作大学有岡研究室を中心とし、真鍋島の子育てに関する調査を行っている。

(13)小規模住居型児童養育事業を「ファミリーホーム」と言う。

里親の規模が大きいもの。通常委託される児童は 4 名までだが、「ファミリーホーム」では 6 名まで可能。

引用・参考文献

[1] 根ケ山光一（2012）　『アロマザリングの島の子育て』
新曜社,P.153

[2] 日本経済新聞（2013）12 月 30 日朝刊

[3] 前掲書, P.154-155

[4] 汐見稔幸（2005)「子育ち・子育て家庭支援の現状と課題」平成 17 年度青少年健全育成中央フォーラム講演記録,P.1-6

[5] 同上書, P.4

[6] 笠岡市（2013)「笠岡諸島振興計画」(2 次）,P.19

[7] 笠岡市（2003)「笠岡諸島振興計画」(1 次)

[8] 笠岡市（2008)「地域公共交通総合連携計画」

[9] Florcnt Chavouet (2010)『ManaABé Shima』
Editions Philippe Plcquier

[10]富川亜紀子（2010)「多良間島における地域福祉研究のためのノートー多良間島に関する先行研究の動向分析－」地域研究（7）, P.67-71

[11]株式会社イケア・ジャパン（2013)「子どもとの生活に関する意識調査」

[12]横浜市政策局（2013)『横浜市民生活白書』

[13]白石優子他（2013)「沖縄・多良間村における守姉というアロマザリングの予備的調査」教育心理学会第 53 大会

[14]国土交通省（2014)「離島の定住環境に関する調査」